

『断酒会に救われて』

島根県断酒新生会 出雲西支部

安井 文子

2010年4月11日

中国ブロック米子大会(米子市公会堂)

「母さん、疲れた。もう生きていたくない」年老いた母に、言ってはならない言葉を口にしていました。何とも言えない悲しい顔をしていた母を、今でもはっきりと思い出します。酒に溺れた主人が繰り返す、ギャンブルの借金の後始末に疲れ果てていました。

(写真は道の駅キララ多伎からの夕日・出雲市多伎町)---->

最初は数万円だった一回の負けが、どんどんエスカレートして十万円単位になり、やがて百万円単位になりました。片付けても、片付けても終わりのない借金で、将来への不安におびえていました。



「死んでどうする、子どもたちはどうするかね。それで、子どもたちが幸せになれるかね」一番弱いところを突かれ、返す言葉もなく、ただただ涙がこぼれました。

「たった二人の子どもが、よう育てられんか、情けない。母親なら子どものために死に物狂いで生きて、一人前にする義務がある」三十三歳で未亡人となり、五人の子どもを、女手一つで育て上げた気丈な母の言葉でした。「今がどん底だから、もう少し辛抱して頑張りなさい。きっといいことが巡って来るから」

その言葉を信じて、私の服はもちろん、子どものパジャマにいたるまで、姉たちからオフルをもらいながら生活していました。しかし、当の主人は相変わらず今までどおり、毎日仕事帰りにお酒を飲んでいました。それどころか、だんだん量が増えていくばかりで、帰宅が深夜になることも多くなり、一人で歩くこともできないほどの泥酔状態も度々でした。

一体どうなっているのか、何を考えているのか。毎日給料以上のオカネを使って家庭をかえりみることもなく、お酒とギャンブルにのめり込み続ける主人に、愛想も尽き果てていました。平成十年は、私たちにとってとても辛い年でした。顔は腫れ、パンパンに膨らんだお腹をして、島根医大に入院しました。肝硬変で三年もたないという医師の診断でした。

父の病気を心配した娘に、「お酒の飲み過ぎで肝臓が弱っているだけだから、心配はいらない」と告げましたが、「娘として、してあげたいこともある」と言われ、迷った末に余命三年を知らせました。目に涙をいっぱいため

た娘は、「本当のこと教えてくれてありがとう」と言って、自分の部屋に入って行きました。後で娘の部屋を覗くと、布団をかぶって泣いていました。

数日して、弟だけ知らずに後悔させたくないからと娘が言い出し、何日か迷った末に、息子にも話しました。息子はただ俯いて、大粒の涙をテーブルの上に流し続けていました。やがて、娘が声を出して泣き始めると、それまで堪えていた息子も声を出して泣きだしました。娘中二、息子中一の時でした。

父親と言葉を交わすこともほとんどなくなり、顔を合わすことさえ避けていた子どもたちでしたが、それは飲んでる父親が嫌いなだけだと思い知らされました。何とか子供たちのために生かさなければならぬと、私も覚悟を決めました。

三カ月の入院を期にお酒をやめるか、もしたとえ飲んだとしても、当然少なくするだろうと思っていた家族の期待を見事に裏切りました。退院して一カ月も経たないうちに、また今までどおりの酒のみに戻っていました。そして二度目の入院。今度は、退院して直ぐに飲み始めました。

そんな主人ですから、肝臓が良くなるはずもなく、何度かの入退院を繰り返しながら、とうとう仕事も出来ないほど悪化して、少しでも長く生きさせるためには、仕事をやめた方がいいという医師の言葉で、平成十年三月に退職を決めました。

経済的に大変でも、主人の命を守ろうと苦渋の決断をしましたが、家族の思いとは裏腹に、当の本人は、家族が出かけるのを待っていたかのように、朝から一キロ先の酒屋通いです。仕事に行きかけた私が、忘れ物をして我が家に引き返すと、もう主人は酒屋に向かいかけていました。

クルマの窓を開けて、「どこに行く」と訊くと、「散歩」としらじらしい答えが返ってきます。無理やりクルマに乗せて家に連れて帰りましたが、またその後酒屋に向かったのでしょう。夕方家に帰ってみると、部屋中酒の臭いでプンプンしています。

「また飲んだの」と訊くと「飲んどらん」。どうして、「ごめん、飲んでしまった」と素直に言えないのでしょうか。そうすれば私の怒りも頂点に達することもなかったでしょうに。ミエミエの嘘をつく主人に腹が立って、言わなくてもいいことまで言って、またケンカ。私が小言を毎日言い続けていれば、いつか主人も分かってくれるだろうし、それが子どもたちを守ることだと思っていました。

★

しかし、主人の酒は止まらず、入退院を繰り返すばかりでした。土日は家族が家にいて、思うように飲めないからと、金曜日に飲み溜めをしていました。夜になると、頭が割れるように痛い、胸が苦しい、そしてケイレン。息子が主人を背負ってクルマに乗せ、病院へ連れていくことも度々でした。救急車も三度呼びました。

田舎のことで、サイレンの音を聞きつけた近所の方が家の前に大勢集まって来て、どうしたことかと玄関付近を覗いておられる中、酒臭い主人が担架に乗せられ、人混みの中を通過して救急車へ……。集まっておられる人たちに、酒の臭いが判らないはずもなく、また近所の人たちの茶飲み話になると思うと、恥ずかしさでいっぱいでした。

(写真は出雲市多伎町の浜辺・日本の夕日百選のひとつ：出雲市多伎町)



病院でアルコールを抜く点滴をしてもらうのも、とても恥ずかしい思いをしました。救急のベッドで命のやりとりをしておられる方の隣で、酒を止められている主人が大酒を飲んで枕を並べている。連れて歩く私たち家族にも呆れておられたと思います。

近くにいる主人のおじ達が、何回か注意をしてくれました。いつも行く酒屋にも、酒を売らないように頼みにも行ってくれましたが効果はなく、呆れ果てたおじ達の足が、身内である我が家から遠のきました。飲んで度々入院する病院にも、まったく訪ねて来てくれなくなりました。それでも、もう一度注意をして欲しいとお願いに行きましたが、「自分たちが行っても、もうダメだから」と断られました。

とうとう、入退院を繰り返す主人の入院費に困るようになり、実家の母にオカネを借りに行きました。親であっても、とてもイヤなものでした。ましてやお酒を飲んでの入院なので申し訳ない想いと、嫁いだ娘がオカネの無心に来る母の気持ちを考えると、こんなことをさせる主人が憎くて仕方ありませんでした。

こんな生活を繰り返しているうちに、子どもたちも高校を卒業する年になっていました。進学を決めたことを話すと、何人かの親戚が、子どもたちの就職を当然のように勧めてきました。入院費だけでも大変なのに、子どもの教育費まで背負って、これ以上苦勞をしなくてもいいじゃないかという理由でした。

私のことを心配して言ってくれたことは十分分かっていましたが、酒のみの父親のために、子どもたちの夢を諦めさせることは出来ませんでした。酒のために何かを諦めることは、酒に負けたような気がして、何よりも辛い気がしました。

主人は、退院して次の入院までが、だんだん短くなってきました。退院して二週間で、また入院するような有様です。食道の静脈瘤がいつ破裂してもおかしくないほどに大きくなっていました。お酒を飲んで、血行が良くなると危ないからと、病院で念を押されて退院しましたが、飲み続けていた主人が、置手紙を残していなくなりました。

親戚が集まり、近くを捜しましたが見つかりません。日が暮れる前に、何とかしないといけないということになり、警察にも連絡しました。パトカーが二台、サイレンを鳴らしてやって来ました。サイレンの音を聞いて、近所の人たちが我が家の周りを遠まきに、様子を窺っておられます。

役場の方も来られ、防災無線で、町内に放送する手配をしてくださいました。刑事さんは、主人の写真を使って、全国へ家出人の手配の手続きをされている時でした。乗車の確認をお願いしていたJRから、主人が米子へ向かったとの連絡が来ました。

私たち親子三人は、行ったことのない米子に、地図を片手に向かいました。米子駅に着き、先ず駅員さんに主人を見かけなかったか聞いてみましたが、よく判りませんでした。今度は、駅前のタクシーの運転手さんに一台ずつ訊いて回りました。

娘は泣きながら、「お父さんを捜しています。病気なので早く病院に連れて行かないと死んでしまいます。お願いします。お願いします。」と一台一台に、深々と頭を下げています。

一人の運転手さんが、違うタクシー会社の運転手さんを集めて全車に無線連絡の手配をしてくださり、情報が入れれば私たちのケイタイに電話してもらえることになりました。それから、私たちはホテルを一軒一軒訪ね、主人を捜して夜中の二時過ぎまでクタクタになりながら捜し歩きました。

次の朝、夜明けを待って、米子の街をクルマで走りました。立ち寄りそうな所で待っていると、タクシーに乗って主人がやって来ました。家では大騒ぎになっているのに、ちょっと遊びに来たという風に、心配していた子どもたちにも何も言わず、悪びれた様子も見せずにクルマに乗り、家に帰りました。家に着いても、泊っていた親戚の人にもことわりを言うでもなく、キョトンとしていました。その時も、酒の臭いがしていました。

★

連れて帰ったものの、昼間一人になる主人を家に置いておくこともできず、松江におられる内科の先生に事情を話して、入院させてもらいました。入院してお酒をやめれば、ちゃんとした主人に戻るのではないかと思っていました。

後日病院へ電話したところ、応対に出られた看護師さんから、病院の近くの自動販売機でお酒を買っていたと聞かされ、直ぐ病院に行きました。松江に向かうクルマの中で、涙が止まりませんでした。とうとうここまで来てし

まったのかと思うと、今まで子どもたちのためと、辛うじて支えていた自分の気持ちがプツリと切れて、もう終わったと感じました。

(写真は下田橋から見た小田川の上流・出雲市多伎町)---->



その日は先生にだけ会って、主人の顔も見ずに帰りました。顔も見なくなかったのです。今まで十五回もの入院をしても、こんなことは一度もありませんでした。退院する時は元気になっているのが、私の励みであり、退院を喜ぶ子どもたちの笑顔が、私のエネルギーでした。でも、もう何もかも、どうでもいいと思いました。

病院の先生から連絡を受けて、先生に会いに行きました。私の気持ちを聞いてくださった先生が、「自分に任せてみないか」と言われました。

精神科の入院と断酒会の話をして、二週間だけ主人と話し合う時間をくれと言われ、お願いしました。二週間が来て、先生から連絡をもらい、病院に行くと、やっと主人が決心をしたとのことでした。「入院中に一度断酒会に行ってみなさい」と言われ、断酒会の方の連絡先も調べて下さり、電話をしました。

早速、病院の近くにある断酒会に行ってみようと言われ、断酒会の方が、わざわざ松江の病院まで迎えに来て、連れて行って下さいました。見ず知らずの私たちのために、遠くから来て下さったことに、先ず驚きました。そして、例会に出席した主人が体験談に感動し、好印象を持ったことにも驚きました。

松江の内科病院を退院すると、その足で精神科に入院しました。精神科を退院した日から、断酒会歩きが始まり、順調に断酒が続いていました。私たち家族は、本当に喜びました。奇跡が起きたと思いました。

近所の方と出来るだけ顔を合わせないように、外に出ることも控え、いつもうつむいて歩いていた私が、いつの間にか真っ直ぐ、前を向いて歩いていることにも、自分自身驚きました。子どもたちも、家の中でよく話をするようになりました。笑い声も聞こえるようになって、私たちは有頂天になっていました。

退院から一ヵ月半目に、主人が飲んだ時には、飲んだ主人に無性に腹が立ちました。毎日、毎日、迎えに来て、例会に連れて行って下さる会員の方に、申し訳ない気持ちと、また家族を裏切ったことに対して、主人を責めることしか出来ませんでした。飲んだ主人が悪い、皆がこんなに一生懸命なのに…。

私たちは何にも悪くない、根性のない主人だけが悪い、そう思っていました。家に来て下さった会員の方が、落胆する息子に、「お父さんは、今頑張っている最中だから、もう少し待ってあげなさい」と言われ、元気を取り戻しました。その言葉で、私自身もハッとしました。

そうだ、主人は頑張っている。あれほど好きだったお酒を一カ月半も飲まずにいたことは、主人が一日、一日、努力していたからで、飲めなくなったわけではなく、飲まない努力を続けていたからだと気づきました。あれほど憎んでいた主人に、初めて、ちょっとだけ、寄り添えた気がしました。

しかしですが、またお酒の味を思い出した主人は、二度目の精神科を退院した後も、お酒は止まりませんでした。同じ頃、断酒会に入会した何人かの方は、ずっとやめ続けておられるのに、主人だけが失敗続きで、例会に出ると惨めな気持ちにもなりました。「例会に出続けていれば、必ずやめられる」酒臭い主人を、毎日迎えに来て、連れて行って下さった先輩会員の方の、この言葉が励みでした。

いつも飲んで帰って来ない、親戚でさえ見放した主人を、親子三人で捜し回っていた私たちでしたが、夜遅くまで、会員の方々が一緒に捜し歩いて下さいました。本当にありがたかったと感謝しています。飲んだ主人にも、温かい言葉をかけ続けて下さいました。

「肝硬変で、余命あと三年」と島根医大で診断されてから、今年で十二年目を迎えております。皆さんのお陰で、現在は主人もすっかり元気になりました。断酒会でいただいた命を大切に、飲まない一日を積み重ねてくれる主人と、ここまで導いて下さった断酒会の皆さんに感謝しながら、これからもこの会の中で、生かしていただきたいと思います。これからもよろしくお願い致します。(了)